庄野潤三「逸見小学校」私見

A Study of SHONO Junzo's *Hemishogakko*

鷺　只雄
Tadao SAGI

はじめに

雑誌「新潮」の二〇一一（平成23）年八月号に生前未発表の中編小説「逸見小学校」一八〇枚（途中三枚が欠けている）が掲載された。題材は庄野文学には珍しく軍隊生活に取材したものであり、「戦争文学」と言ってよい。脱稿の日付は明記されていて一九四九（昭和24）年一月二一日とある。

「逸見小学校」の発表に際しては「新潮」編集部から私に「解題」執筆の以来があったので小文を寄せ、同誌に掲載されている。

が、何分にも倉卒の間の事ではあり、枚数にも制限があり、更に新たな問題が浮上してきたこともあるので、それらについてここで私見を述べておきたいと思う。

一　作品の虚実

「逸見小学校」という作品の骨格は、日本有数の軍港都市横須賀の海軍駐屯地にあてられた逸見小学校（実在する）を舞台に、主として若い尉官級の海軍軍人の群像の日常を描く中に、千野少尉とヒロインみちことのロマンスを配したものである。

従って当然地名は実在で登場するし、対象として描かれる事象、風物等もまた同様である。

そうすると次に以下のような問題が発生する。事実との食い違いである。勿論、その場合に小説であるからフィクションが入ることは許容するという程度のフレキシビリティ、あるいはトレランスは保証した上の話である。

そういう読者のお一人、一九二九（昭4）年三月八日横須賀市安浦

町一丁目生まれの遠藤雅夫氏は二八歳まで横須賀におられ、以後は勤務の都合で（氏は北大で医学博士の学位をとられた）北海道札幌市周辺にお住まいである。

氏は非常に熱心な読者で、初出の「新潮」を熟読するや直ちに一書を寄せられ、事実との食い違いや疑問点をＡ４判七枚、二〇項目に亘って指摘され、続いて第二稿はＡ４判二枚、一〇項目と写真11葉（２Ｌサイズ）から成り、第一稿を更に補強するものである。

氏の指摘は非常に鋭く、又実証的なもので、横須賀の地勢学に詳しくない者にとっても説得力があって、この作品で庄野氏が企図したところのものをあれこれ考えることができて極めて有益であった。

従って読者にとって有益と思われるそれらのいくつかを以下に紹介するところから稿を始めることにしたい。頁と行数は初出誌「新潮」のそれをさす。

二　電車線路

A148頁上段6行目　「電車線路に沿つて、市の中心部に向かつて（中略）歩き始めた。」

これについて遠藤氏はこう言う。

当時の久里浜線（横須賀と久里浜間の路線、昭和19年4月1日開通、現ＪＲ横須賀線）は横須賀駅を出ると、すぐに踏切のある国道を渡って約50㍍で、最深部に非常出口を備えた金谷まで２０８９㍍の横須賀トンネルに入る。

横須賀駅から市の中心部へ行くには、駅を出て斜め左へ国道を行くので、線路に沿っては行けない。

路は駅から斜め左に約70㍍で逸見上陸場の衛門があって、そこからは直線道路になり、左側は横須賀海軍工廠の長いコンクリート塀で、右側は駅から200㍍程で約160㍍程の間、関東大震災の時に崖崩れを起こして大勢亡くなった崖が続いていて、その先は海軍下士官集会所（現メルキュールホテル）まで約150㍍が新井屋旅館を含み家並みになっている。横須賀駅から警備隊までの道路には電車線路はない。

つまり、当時の久里浜線（現在のＪＲ横須賀線）は横須賀駅を出るとすぐに２０００㍍を超えるトンネルに入ってしまってほかに電車線路はないので、小説のようには行けないというのである。

これには驚いた。実地に横須賀に行って歩いて見て一層驚いた。氏の指摘の通りであったからだ。横須賀生まれの横須賀育ちにとっては一声あげずにはいられないのは尤もなことである。

どうしてこういうことが起こったのか。

一つは無論、作者にとっては初めての土地であるからそれ故の無知、あるいは勘違いということもあるかもしれない。

しかしそれにしても、その後も「電車道路」と繰返すからにはもう少し合理的な説明が必要であるかもしれない。その点について氏は

三　貨物引き込み線

B148頁上段18行目　「電車道路の反対側を進んで来た作業服の一隊」

を引いて次のように述べる。

ここでは横須賀駅から海軍下士官集会所までの描写である。前述の通り、この辺りでは久里浜線は既にトンネルに入っているので、この国道では久里浜線の電車は見えないし、その他の電車のための線路もない。この間は広い車道と左右の歩道だけで、この頃は塀側の歩道には多くの素掘りの待避壕が掘られていて、歩行者は車道側に残された狭い部分を歩かなければならない。今ではこの道路の途中には二本の自動車道が降りて来て合流している。

千野少尉は「歩道の横を…石塀が続いている」ということから塀側の、つまり右側の道を歩いている。そうすると「電車道路の反対側」は崖側の歩道であり、横須賀駅から出て左手の逸見上陸場から下士官集会所への直線道路の右側には、高い崖があってその先は汐入への道路が分かれて家並みと新井屋旅館がある。この道路には電車は通っていないので「電車道路」ではない。

この小説に出てくる電車線路あるいは電車道路とは、コンクリート塀の横須賀海軍工廠側（海側）に設置されていた、横須賀のヤードから駅の海側を通り、逸見上陸場の衛門を横切って横須賀海軍工廠までの貨物引き込み線のことであろう。

そうすると小説に書かれている昭20年という時期には、国道からはこの線路を貨物列車が走っていても、衛門での約10㍍を除いては外部からは見えないのである。

この稿は昭和24年に脱稿しておいでなので、庄野氏は戦前、戦中の横須賀をご存知なく、戦後のコンクリート塀の撤去され、線路がまだ残っている臨海公園の情景をご覧になって、「電車線路に沿って」「電車道路」などと書かれたものと推察する。

戦後かなり長い間は確かに海側の歩道を歩けば左手にはこの線路が残っていた。しかし戦後のこの道路を歩くときは、普通は目の前の横須賀海軍工廠跡の建物や並んでいるドックの前の狭い海やガントリークレーンに目をとられるので、よくこの線路を見つけられたと思う。それ程目立たない存在であった。この道路のことを電車道路と言われては古い横須賀市民でもただ戸惑うだけであろう。（以下略）

つまり、遠藤氏はさんざん当惑された挙句、ようやく一つの結論に到達されるわけで、それが横須賀駅から海軍工廠までの貨物引き込み線であった。しかもこの引き込み線は徹底的に隠されていて駅から工廠までの約1キロメートルの間、高さ3メートルのコンクリート塀で目隠しされていて、距離にして僅かに10メートル程だけの衛門の区間だけ見えるというものであるからよくぞ気がついたという種類のものであった。

それ故「電車線路」はないわけで「貨物の引き込み線」であるから厳密には不正確な表現となることは避けられないであろう。

ただし、右の遠藤氏の引用文中後半の「この稿は昭和24年に脱稿しておいでなので、庄野氏は戦前、戦中の横須賀をご存知なく、……書かれたものと推察する。」という部分については訂正と吟味が必要である。

「解題」にも記したように庄野氏は昭和20年3月末から4月末まで横須賀の逸見小学校に駐屯していた事は事実であるから、庄野氏が戦前、戦中の横須賀を知らないという記述は訂正されなければならない。

次いで後半の記述で、戦後にコンクリート塀が撤去され、引き込み

線路がまだ残っている臨海公園の情景を見て、「電車線路に沿って」「電車道路」などと書いたのではないかと「推察」しておられるのであるが、真偽の程は確認されていない。

しかし、脱稿の日付が一九四九年一月二一日であるということは戦後の混乱期の真っ直中であったわけで、餓死者が一千万人出るだろうと騒がれ、列車の混雑ぶりは殺人的と言われていた時代に、この程度の調査、あるいは確認をするためにわざわざ大阪から上京して横須賀に赴いたとはにわかには信じられないことではないかということを付言しておきたい。

四　白い壁と横須賀の象徴

C148頁上段16行目　「その白い石塀は、何処まで行つても果てしなく一方の視界を遮つてゐた。」

「白い石塀」というのは、横須賀駅から出て駅前左手にある海軍の逸見上陸場（軍港逸見門）衛門から海軍下士官兵集会所（戦後のＥＭクラブ、現在のメルキュールホテル）で左に曲がって、横須賀海軍工廠の正門（横須賀鎮守府前）までの間の約一キロの国道の左手（横須賀海軍工廠側）は白いコンクリート製の高さ約3㍍の壁が続いていて、内部の建造物はガントリークレーンを除いてごく上部しか見えない。この高い塀は横須賀の電車が横須賀駅へ入るすぐ手前の所で軍港が一目で見える場所を通るがそこにも電車からの目を避けて同じものが設置されていた。この壁は「白い」が石塀ではない。（中略）この11行目から上段最後の行までは、始めて横須賀を歩いていての感想を書いているのだが、そうだとすれば重大な書き落としがある。歩いている人物が軍人であるから、確かに敬礼に気を遣っていると思うので、軍人の往来が多い街だから上官の姿には注意が必要になり、下級の者への答礼にも気を遣っていると思われるので、その気持ちがよく表されている。

しかし横須賀駅を出るとすぐに目に止まるのが、逸見上陸場の衛門から狭い小海を隔てた、横須賀海軍工廠の第五船渠のむこう側に見える、第六船渠（6万噸、通称6号ドック）にある350噸ハンマーヘッドクレーンと、横須賀海軍工廠の第二船台全体を覆っている巨大なガントリークレーンである。これらの構造物は横須賀海軍工廠の象徴でもあるが、記念艦三笠と共に横須賀の象徴である。「石塀の向こうに」見える「港の青い水」を想像するよりも先に、錆色の巨大なガントリークレーンが広がって見えていなければならない。始めて横須賀へ来た人はこのクレーンと横須賀海軍工廠から絶え間なく鳴り響いてくる轟音と、その合間を縫って聞こえるリベッティングの音に圧倒されるのである。ここの轟音はどぶ板通りあたりの国道では大声をださないと話もできない程であった。小説のこの道路を歩いているあたりでも、もうこの音ははっきり聞こえていて、気になる筈である。（中略）この横須賀市民には懐かしいガントリークレーンは一九七五年一月二九日、350噸クレーンは二〇〇一年五月二〇日に解体されて、横須賀の景色が寂しくなった。

ここには「逸見小学校」という作品を読む上で重要な二つの指摘が

なされている。

一つは「白い石壁」（遠藤氏の説明にもあるようにこれは「石塀」ではなく、「白いコンクリート製の壁」）であり、これが横須賀駅から海軍工廠までの国道の左側を約一キロにわたって高さ3㍍のコンクリートの壁があたかも万里の長城の如く延々と続いていた。言うまでもなく軍港都市の機密保持のための目隠しである。

もう一つは、これが重要な点であるが、横須賀に始めて足を踏み入れた人であれば横須賀のシンボルとでもいうべき巨大なクレーンと、海軍工廠から絶え間なく鳴りひびいてくるリベットの轟音のすさまじさに圧倒される筈なのである。

ところがこの作品ではそれらは影も形もない。とすればこれは「重大な書き落とし」、あるいは落丁と考えるべきなのであろうか。

答はノーである。何故なら、巨大なクレーンにしてもリベットの轟音にしてもそれらはいわば横須賀の属性であり、シンボルでもある。それを影も形もなく消し去って平然としているということは、作者にはある明確な横須賀像が存在していて、それを刻みあげる事に挑戦しているとしか考えられないからである。では作者のイメージする横須賀像とはどのようなものか？　それは最初のパラグラフの最後に示されている。148頁下段5行目～9行目である。

それは身体だけは見たところ健康な壮年でありながら、髪といふ髪はことごとく白髪で、歯は全部抜け落ちた――そのやうな人間を連想させるものがあつた。たしかに此処には末期のまちの相が漂つてゐる。その中を彼は歩いて行つた。

作者のとらえた横須賀像とは「身体だけは見たところ健康な壮年でありながら、髪といふ髪はことごとく白髪で、歯は全部抜け落ちたやうな人間を連想」させるものであり、一言でいえば「末期のまちの相」を示したものとしてとらえられているからである。換言すれば作者にとってこのまちは、一見健康そうに見えながら実は生きながら死んでいる死のまち、あるいは廃人のまちということになると思われる。

これに対して350噸ハンマーヘッドクレーンや巨大なガントリークレーンが活動する情景が入ってきたとすればそれはまさしく「末期のまち」とは対極にあるものであって、ここには入りよう筈もないものであったことが了解していただけるものと思う。

その意味では横須賀の人びと、横須賀びいきの人にとってはまことに残念な結果といわざるをえない。

五　ドーリットル空襲の意味

D148頁下段2行目　「今日まで一度も爆撃を受けたことのないこの軍港」

これに対して氏は次のように反論する。

「爆撃」を「爆弾投下」と解釈するか、「空爆」とするか解釈が分かれると思うが、横須賀は両方とも受けている。小説の時代が一九四五年三月末だからそれ以前の横須賀空襲を見ると、最初の空襲は昭和17年4月17（ママ）日のドウリットル空襲で、ノースアメリカンB―25が横須賀海軍工廠内の潜水母艦大鯨に爆弾を投下

している。昭和20年1月9日にはボーイングB―29による逸見町への小規模の爆撃があった。

次に163ページにも出てくるがそこでは「2月16日に艦載機一〇〇〇機の空襲」となっているが横須賀は空襲されていない記述である。この機数は関東地区に襲来したもので、横須賀には16日と17日に来襲があって、この一〇〇〇機の内、両日とも約三〇〇機宛の終日の空襲があり、軍事施設だけでなく町も激しい機銃掃射を受け、軍事施設と町とに21発の爆撃を受けた。3月12日には小規模だが長坂にB―29による爆撃を受けている（神奈川県警察史）。

この他にもB―29の通過は何度もあった。横須賀駅のプラットホームのすぐ目の前に見える高台の中腹にあった民家の跡にも爆撃で出来たすり鉢状の穴が戦後長くまで残っていた。従ってなぜこういう説明になったのか判らない。

と記す。

本稿では「爆弾投下」も「空襲」も共に「爆撃」と広く解釈するが、横須賀は記録を調べて見ると遠藤氏が指摘されるように実は両方とも何度も受けている。次に表1、表2を引用する。

ところでここに厄介な問題が起こる。表2の典拠は『神奈川県警察史　中巻』（昭47・9・30　神奈川県警察本部）に集計されているもので、今回私が空襲の被害に関する統計として参照したものの中では、少なくとも形式的には最もととのっていると判断されたのでここに引用したのであるが、しかし果たして被害の実際はどうであったのかと言えば、わからないというほかはない。

表1

ドーリットル空襲
昭17・4・18
B25　16機

→ 東京・横浜・川崎方面（12機）
名古屋（2機）・神戸（1機）
→ 横須賀（1機）
→ 海軍工廠に爆弾3発投下するも2発はそれ、1発が潜水艦に命中

爆　弾…21発
焼夷弾1465発
死　者…45名
重　傷…153名
全　焼…160戸

表2　神奈川県下の空襲被害状況一覧

県下における空襲被害状況一覧表（神奈川県調）

空襲回数	年月日	時間	被害地域	襲来機数	投下弾 爆弾	投下弾 焼夷弾	人的被害 死者	人的被害 重傷	人的被害 軽傷	罹災者	罹災戸数	物的被害 全焼	物的被害 半焼	物的被害 全壊	物的被害 半壊	備考
1	19 11.24	2.40 3.40	横須賀市逸見、葉山町古庭、川崎臨港、高津署	B29 82	10	4	10	9	24	43	7			1	6	
2	19 11.27	13.25	足柄下郡三保村	B29 2	6	2										
3	19 12.25	3.05 3.15	横浜市鶴見区、港北区	B29 3		218			5	26	7	7	1			
4	20 1.9	13.45 14.25	鎌倉郡深沢村、横須賀市逸見町、横浜市中区、神奈川区	B29 21			6		5	12						
5	20 1.27	14.40	川崎市登戸	B29 26				1	2							
6	20 2.10	23.06 23.18	高座郡御所見村	B29 1	3											山林・畑地に投弾のため被害なし
7	20 2.15	13.55 14.08	横浜市戸塚区	B29 2	9		3			3						
8	20 2.16	7.33 16.35	横浜市、川崎市、小田原市、平塚市、三浦郡、中郡、藤沢市、横須賀市	艦載機 273	10	1	24	47	115	170						本空襲は銃撃を主とした、従って罹災戸数なし
9	20 2.17	7.48 12.09	横浜市、川崎市、藤沢市、平塚市、中郡、高座郡	艦載機 320	84		11	37	53	91	1				1	
10	20 2.19	14.43 15.39	横浜市鶴見区、神奈川区	B29 123	53	438	8	4	11	312	53	20	4	12	27	
11	20 2.25	8.05 8.43	横浜市、足柄下郡、足柄上郡	艦載機 116	3	200	2	2	6	10						
12	20 3.5	14.00	川崎市堀川町	B29 2	1										1	
13	20 3.10	1.05	横浜市港北区樽町	B29 3		988			1			21	1			

	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
	20 7.5	20 7.4	20 6.11	20 6.11	20 5.29	20 5.25~5.26	20 5.24	20 5.19	20 5.17	20 5.8	20 4.24	20 4.19	20 4.15~4.16	20 4.12	20 4.7	20 4.4	20 4.2	20 3.20	20 3.12	20 3.11
	10.35 12.35	12.07 13.15	11.30 12.10	9.38 5.25	9.15 10.50	22.02 1.30	1.00 3.55	9.52 11.20	11.25 13.25	11.24 12.40	8.25 9.40	10.00 10.40	22.25 1.09	11.00 11.40	9.30 10.40	2.08 4.24	2.10 3.40	12.40	2.15	13.38
	三浦郡三崎町城ヶ島	横須賀市汐入町、坂本町、山王町	川崎市久本、高座郡、愛甲郡	横浜市中区、磯子区	横浜市中区、南区、西区、神奈川区、保土ヶ谷区、鶴見区、川崎市	横浜市、川崎市、高座郡、横須賀市、藤沢市	横浜市、川崎市、高座郡	中郡大山町	藤沢市、高座郡、中群、横浜市戸塚区	三浦郡南下浦町、剣ヶ崎灯台	横浜市横浜港、葉山町、津久井郡中野町	横浜市南区、戸塚区、高座郡、三浦郡	川崎市、横浜市、鶴見区、神奈川区、保土ヶ谷区、磯子区、中区	愛甲郡、厚木、足柄上郡、松田、平塚市	横浜市南区、保土ヶ谷区、磯子区、鎌倉郡	横浜市神奈川区、港北区、戸塚区、川崎市(臨港)、中原(高津)	横浜市港北区恩田町、藤沢市辻堂、川崎市木月	横浜市港北区中山町	横須賀市長坂	三浦郡三崎町小網代
	P51 12	P51 60	P51 42	B29 363 P51 30	B29 500 P51 100	B29 500	B29 250	B29 62 P51 10	B29 1 P51 40	P51 18	B29 3	P51 40	B29 200	P51 20 B29 60	B29 60	B29 80	B29 60	B29 1	B29 1	B29 2
				120			5	8			4	4	2,549	1		536	24	12	14	
					257,205	638	87,165					10	75,747	10		342				2
	2		1	136	3,787	7	74	3	3			8	972		1	398	1		2	
	1	1	3	94	1,554	4	56	2	2	2		2	461			130	1			
		2	1	400	10,873	11	129		3			1	1,751		4	386	3	1	1	
				1,450	313,144	8,282	9,933	3	25			148	264,411		5	5,873	8	1	8	
				144	79,350	115	2,047		5			35	52,655			1,163	1		2	
				18	79,399	114	2,037		3			35	52,630			709				
					149	1	110		2			5	137			33				
				126	22		7						25	1		424	1		2	
				319	26		2						70			542			1	
	沖合				旧横浜市全域はほとんど焼失											本空襲は主として横浜、川崎の工場地帯を爆撃した				山火事発生、他は被害なし

	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
	20 8.15	20 8.13	20 8.10	20 8.7	20 8.6	20 8.5	20 8.3	20 8.1~8.2	20 7.30	20 7.28	20 7.25~7.26	20 7.18	20 7.16~7.17	20 7.12~7.13	20 7.11	20 7.10	20 7.8	20 7.7	20 7.6
	2.30	6.40 17.10	8.30	10.40 11.10	9.05 9.50	11.15 12.34	9.54 11.30	20.55 2.41	5.48 21.15	8.00 13.00	21.38 0.12	11.53 17.30	22.32 3.00	22.55 2.00	12.43	5.10 18.30	11.55 13.50	23.25 3.45	11.42 13.28
合計	小田原市	横浜市、川崎市、平塚市、足柄上郡、足柄下郡、小田原市、藤沢市、高座郡	横浜市	足柄上郡、中郡	愛甲郡、高座郡、中郡	足柄下郡、中郡、足柄上郡	小田原市、足柄上郡、高座郡	横浜市、川崎市、津久井郡	藤沢市、高座郡、足柄下郡、平塚市、中郡	横浜市、平塚市、横須賀市、愛甲郡、中郡、川崎市、	横浜市鶴見区、川崎市扇町、大川町	横浜市、横須賀市、三浦郡、鎌倉郡、愛甲郡	平塚市、中郡、高座郡、小田原市	川崎市(臨港)、横浜市鶴見区	浦賀町島ヶ崎	横浜市、高座郡、足柄下郡、横須賀市、愛甲郡、	中郡、足柄下郡、高座郡	足柄下郡酒匂町	高座郡、愛甲郡、横須賀市
5,439	B29 30	艦載機 200	艦載機 4	艦載機 40	P51 30	P51 34	P51 37	B29 100	艦載機 315	P51 50	B29 50	艦載機 250	B29 117	B29 50	B24 1 P51 1	艦載機 420	P51 117	B29 80	P51 24
7,453		123		2				2,316	105	3	797	57		565		29			
615,350	606							500			6		189,638	630				1,000	
6,319	12	56	3	4	1	11	6	70	51	5	115	15	237	215	2	9	1	1	6
2,813	2	31		13	6	11	7	16	50	17	31	14	118	71		3	2	2	6
14,316	6	41		6	2	15	6	10	59	23	67	60	150	62		12	7		2
644,591	1,464	401	3	171		37		420	251		396	661	35,336	773				39	
144,467	469	37		37		29		172	13		93	152	7,678	98				11	
143,964	469	6		37	2	29		104	2		27	1	8,263	19				11	
482	3	5				1		19	1				4	4		1			
922		31						68	11		133	43		79		6			
1,415		59						95	24		43	124		75					
															沖合				

つまり例の「軍機の秘密」に触れるからで、メディアでの発表にはきびしい制約が課されている上に、たとえ空襲の記事が書かれたとしてもそれらが全て掲載されたわけではないからである。

従って正確な空襲の記録がない現状では横須賀の場合、次のように根拠もなくバラバラに並列されているのが現状である。

1、昭和24年経済安定本部「太平洋戦争による我が国の被害総合報告書」によると、空襲による横須賀の被害は、死亡17人、負傷90人、行方不明なし、計107人。全焼二戸、半焼なし、全壊70戸、半壊233戸、計305戸と報告され、三浦半島への空襲は15回となっている。(『横須賀市史(上)』昭63・12(日の記載なし)　横須賀市)

2、読売新聞社横浜支局編『神奈川の歴史(下)』(昭41・12・20　有隣堂)によれば「県の調査によると(空襲は)横須賀八回」

3、横須賀市立逸見小学校創立百周年記念事業委員会『逸見百年―逸見と学校のあゆみ―』(昭48・4・30　同上刊)では「横須賀市は前後八回の空襲を受けた」とする。

つまり、横須賀の空襲については8回、15回(これは三浦半島まで拡大されているが)、それから表1の1回、表2の10回というふうに、根拠も明示されないままに(表2の場合は一応形式的にはととのってはいるが、実際の現状を正確に記述に反映しているかどうかについては前述のような事情があるので大いに疑問がある)記述されているが、それらの正確度については今後の吟味にまたなければならない。

ただし、ここまでの記述で言いうること、概括できることを要約すれば次のように言ってよいかと思う。

横須賀は日本海軍最大の拠点でありながら、言われるようにそこへの空襲被害は客観的に見て僅少であった。米英の艦載機による散発的かつ小規模な空襲はあったが、組織的なものではなかったために、他の軍港都市を含む、日本のほとんどの都市が空襲によって壊滅的な被害をこうむったのに対して、横須賀への空襲は少なく、市街地・工廠とも被害は軽微であった。

そのため、今なお時折ささやかれる伝説が生まれたと思われる。「アメリカ軍は日本占領後、横須賀を軍港として使うことを計算に入れて空襲に手加減していた」と。

しかし、それは単なる俗説に過ぎないと見るべきであろう。

というのはアメリカ陸軍航空隊司令部によって作成された“Air Target Intelligence , Japanese War : Target Analysis”「対日空爆目標情報」(45・2・22発行[1])があり、これによれば横須賀は「あらゆる種別の艦艇が修理可能」な「日本で最も重要な海軍工廠」として爆撃目標になっており、実際に45年7月18日には横須賀にとっては最大規模の空襲となり、爆弾が戦艦長門の艦橋に命中し、艦長以下35名が死亡した他、春日丸が沈没し、工廠内で多数の死傷者が出るなど甚大な被害を出しているからである。

にもかかわらず、横須賀市内への空襲では東京、横浜のように市街地全体が焦土と化す絨毯爆撃は一度もなく、殆どは空母艦載機からの機銃掃射による局地的な攻撃であり[2]、他の都市と比較した場合、軽微と言わざるを得ないであろう。

作品冒頭の「一九四五年三月末の午後」の時点での空襲の実態をもう少し詳しく考えるために表2を見てみよう。ただし、誤解のないように一言ことわっておくが、それはすでに指摘したように、表2の記述をそのまま事実と信じるからではなく、拠るべきものが何もない現状の中ではともかくも形式をととのえており、何よりも事実を過少に評価することはあっても、過大に評価して記述することはありえないことであるから、この事実の認識に立って判断してゆくことをことわっておきたい。

表3　ドーリットル隊の任務遂行結果（総員16機×5名＝80名）

離艦順序	目標都市	迎撃機	対空砲火	戦　　果	着地の状況
1	東　京	9機	激　烈	工場地帯	パラシュート降下、衢県の北110キロ
2	東　京	なし	な　し	工場と倉庫	寧波付近に胴体着陸
3	東　京	数機	かなり	ガス、化学工場、ドック地域	パラシュート降下、衢県の南東、1名死亡
4	東　京	多数	な　し	機銃故障、爆弾投棄	パラシュート降下、上饒の南東
5	東　京	なし	激　烈	油槽、発電所、工場	パラシュート降下、衢県の南東
6	東　京	なし	激　烈	製鉄所	寧波沖の海上に激突、2名死亡、3名捕虜※6
7	東　京	なし	かなり	工場、製鉄所	象山沖の海上に激突
8	東　京	1機	な　し	大工場	パラシュート降下、ウラジオストックの北64キロ
9	東　京	1機	激　烈	ガス工場、発電所、製油所	パラシュート降下、鄱陽湖の南160キロ
10	東　京	16機	激しい	鉄工所、工場地帯	パラシュート降下、衢県の48キロ
11	横　浜	5機	軽　微	製油所、哨戒艇	パラシュート降下、衢県の北80キロ
12	横　浜	なし	軽　微	ドック地域	パラシュート降下、衢県の北西の淳安
13	横須賀	なし	激しい	ドック地域、空母	パラシュート降下、新建付近
14	名古屋	なし	激しい	飛行機工場、兵舎、タンク、工廠	パラシュート降下、上饒付近
15	神　戸	2機	軽　微	鉄工所	象山沖の海上に激突
16	名古屋	3機	激しい	油槽、飛行機工場	パラシュート降下、南昌地区付近、全員捕虜※16

※6番機は原文では鄱陽湖付近となっている。※16番機は原文では石浦海岸付近となっている。
前出の『東京初空襲―アメリカ特攻作戦の記録』による。

昭和17年4月18日の空母ホーネットからのB25爆撃機16機による空襲が米軍の日本初空襲であり、これは指揮官ドーリットル陸軍中佐の名前からドーリットル空襲とも呼ばれている。

全機、超低空（三〇～五〇〇㍍という[3]）で来襲し、東京、横浜、川崎、横須賀（一機）、名古屋（二機）、神戸（一機）へ飛来して各都市の軍事施設を爆撃、一機はロシア、残り15機は中国大陸へと飛び去った。

全体の被害は爆弾の投下が21発、焼夷弾が千四百六十五発、死者45人、負傷者153人、家屋の全半焼289戸であったという。横須賀へ来た一機は爆弾三発を投下し、そのうち一発は海軍工廠の四号ドック（現在日米海軍横須賀基地内）で改装中の潜水母艦大鯨に命中し、二発は海と山に落ちた[4]という。

この米軍の日本本土への初空襲は開戦から僅か四カ月目という時期であっただけに寝耳に水の驚きをもって迎えられた筈でこの空襲は実際の被害は軽微であったにしても、それまで連戦連敗、敗戦続きで、くさりきっていたアメリカ国民の士気を一気に高揚する結果となった。それに反し、日本軍部の精神的乃至心理的ダメージは決して小さなものではなかった。むしろその効果は測り知れないものであったというべきかもしれない。何故ならそれまでソロモン方面に向けていたその戦力を、本土の防衛に振り向けなければならなくなったからである。更に日本を十分に防衛するためには、太平洋における最前線を更に拡大しなければならぬ破目にも陥ったからである。

その後の空襲は表2によれば2回あるがいずれも軽微で、本格的な空襲は昭和20年に入ってからで、2月16日（と17日―表2には17日には横須賀が入っていない）の「艦載機延千機」（163頁）、「三月十日（中略）B29約百五十機」（同上）による東京空襲で「東京は半分焼野原になった」（同上）と記され、その中には横須賀は含まれず、空襲されていないかの如く記されているが、（163頁下段16行目「二月十六

日に艦載機延千機による米軍機動部隊の波状攻撃は、東京及び静岡の航空基地を中心として行われたという記述の中には後述するように横須賀も空襲されたという認識は含まれていないことに注意していただきたい）しかし、それは小説上の事で、事実としてはそんな事はないので、既に引用して紹介した遠藤氏の記述にもある通り、2月16日と17日の両日にわたって、約300機宛による空襲を受けた。横須賀では横須賀海軍航空隊（現在の横須賀市追浜町・夏島町）が攻撃され被害はあった模様だが、詳細は不明。近隣の海軍航空技術廠や朝比奈峠付近で空から機銃掃射があり、四月四日には川崎市内の工場へ学徒動員されていた生徒が夜間空襲で12名が死亡、20名以上が負傷[5]ということもあった。

これ以上の大きな空襲というと昭和20年7月18日の戦艦長門と海軍工廠への攻撃になるわけで、以上を概括すれば、つぎのようになろう。

横須賀への初空襲は開戦間もない昭和17年4月18日で、緒戦の華々しい戦果の報道に酔わされていた国民としては驚きであったが、しかし海軍工廠が目標のため、市街への被害は少なかった。その後空襲はなく、昭和20年に入って2月16～17日の艦載機の大挙来襲は市民を恐れさせたが被害は少なく7月18日の空襲も艦載機による局地的なタイプの攻撃であって焼夷弾による絨毯爆撃型ではなかったために市街地への被害は少なかったと要約することができるであろう。

ところで先程注意しておいたが昭和20年2月16～17日の艦載機の大挙来襲の際に横須賀も空襲されたという認識が千野の頭の中にはないということを指摘しておいたが、この点が重要になってくるわけで、右の要約の中から2月16～17日の艦載機の大挙来襲の件が脱落する。

そうすると「一九四五年三月の末」の時点で「今日まで一度も爆撃を受けたことのないこの軍港」という表現に矛盾するのは昭和17年4月18日のドーリットル空襲だけということになってくる。

そこでドーリットル空襲の日本国内での受けとめかた、それがどういうふうに認識されていたのかという問題が問われることになろう。

軍の高官が「東京の空には一機も敵機は飛ばせない」と豪語したにもかかわらず、開戦から僅か四カ月後に首都東京が16機もの爆撃機によって空襲されるという事態と、それは予想外の超低空による飛来がこれを可能にした主因であるが、これを迎撃するにあたって当初は敵機の侵入に全く気付かず、爆撃されるに及んで漸く気づくという醜態ぶりであったから満足な邀撃も出来ず、中国やロシアへ逃走され、一機も撃墜出来ずに（当時の新聞に東部軍令部発表として「九機撃墜」といずれも記すが、これは嘘である。何故ならいずれの報告も墜落を確認しておらずに「当時の状況より判断して海中に墜落したことは確実である」（傍点鷺）とか、「当時の状況より判断して遠く逃走し得ざることは明瞭にして海中に墜落したものと判断さる」（同上）とパターン化された表現に明らかであろう。又、このことについては前出の『東京初空襲―アメリカ特攻作戦の記録』の「Ⅱ作戦参加者の報告」の章に参加者各自の体験回想があるので参照されたい。また、この時に米軍機動艦隊をいち早く発見、通報して捕虜となった五名の水兵達の数奇な運命を描いた作品に吉村昭『背中の勲章』（昭46・12　新潮社）がある。）終ったというのは有史以来の屈

辱、汚点であった筈であるからこれを如何に処置するか、あるいはもみ消すかに腐心した筈である。

その場合、露骨な手口としては記録にはカットしてのせない―すでに見た表2の「神奈川県下の空襲被害状況一覧表」のようにドーリットル空襲は臆面もなくカットしてはばからないというのがその典型的なやり口であろう。

その次の手口は対象の価値にケチをつけて低評価、極小化して行って殆ど対象自体を無価値、無意味なものとするやり方である。ドーリットル空襲に対する軍司令部の報道統制のあり方とそれを受けた新聞の報道姿勢はまさしく次に示すように絵に描いたように一致している。

即ち読売新聞は、空襲してきた「敵機はこれを撃退」、「九機を撃墜して我軍の損害は軽微」と東部軍司令部の発表をそのまま報じ、次いで「焼夷弾微力な二キロ」であり、しかも隣組の「平素の訓練発揮」によって大事に至らず未然にこれを封じてしまったとして、敵何するものぞとひたすら士気の高揚をあおっている。また、今回のような「ゲリラ空襲は神経戦的」なものであって実害は少ないものであるから、あくまでも冷静沈着に対処するよう求めている。

更に焼夷弾の性能・搭載量とも「たいしたこと」はないので日頃の訓練通りに対処すれば何ら恐れることはないとして、以下「手掴みで焼夷弾捨つ」、「女一人で消火」、小学生が焼夷弾を「叩き消す」というような〈竹槍精神〉の鼓舞激励を繰り返している。

一方、朝日新聞の方も戦況に関する限り、国外は大本営発表、国内は東部軍司令部発表というふうに発表の源は限られていたわけであるから瓜二つに近い紙面になるのは当然であろう。米軍機来襲の後は、「冷静沈着機敏な処理」、「我家まもる女手」、「燃え盛る焼夷弾も十秒で揉み消す」、「家をあけるな」、という見出しが示しているように、ひたすら家庭の主婦を消火に狩り出すことに躍起になっている。

さてこのように見てきてその結果が果たして当時の為政者、あるいは軍政府関係者らが望むように、米軍機の初空襲は一夜の悪夢として国民の脳裡から一掃することができたのか、それとも重いトラウマとしてのしかかり、初空襲から僅か一カ月半後、ミッドウェーの海戦において四隻の空母を失うという大敗によって戦局の転換から敗北への道を歩むことになったのか、いずれかに決することは困難であろう。

無論、形の上では力ずくで口を封じたわけであるが、その功罪については別に考えなくてはならない。

ここではただ庄野氏が横須賀について「今日まで一度も爆撃をうけたこと」がないというレベルでの認識で書いたものであり、その点に事前調査の面での不十分さが見られると言ってよいかもしれない。

六、情報の管理

E148頁下段2行目　「もはや一隻の軍艦も残つてゐないことは市民はみな知つてゐた」

これに対して氏はこう言われる。

この頃でも横須賀軍港にはよく駆逐艦を主として毎日一、二隻は入港していた。これは軍港が一目で見える私の住んでいた

表4　米軍による本土初空襲関連の新聞記事（S17・4読売新聞）

読売　S17. 4. 19（日）1面

盛旺てめ極氣志に衛防土國

燒夷彈微力な二キロ

沈着機敏の動作で危害最小限

神經戰的ゲリラ空襲

誓つて光輝ある國土防衛

軍事施設外れた盲爆

市民防衛平素の訓練發揮

読売夕刊　S17. 4. 19（日）1面

昭和十七年四月十九日

夕刊

讀賣新聞

帝都空襲の敵機擊退

九機擊墜我方損害輕微

皇室は御安泰にわたらせらる

東部軍司令部では十八日の京濱地方敵機空襲について午後一時五十七分左の如く發表同時にラジオ放送した

午後零時卅分頃敵機數方向より京濱地方に來襲せるもわが空、地兩防空部隊の反擊を受け逐次退散中なり、現在までに判明せる撃墜機數九機にしてわが方の損害は輕微なる模様なり、皇室は御安泰にわたらせらる

読売　S17. 4. 21（火）1面

昭和十七年四月二十一日

讀賣新聞

反擊恐れ三航母退却

敵十機内外が分散來襲

殘存機は支那方面へ遁走

我本土に近接し得ず、片道爆擊

十八日の空襲

菅沼ダイブライター

読売夕刊　S17. 4. 22（水）1面

昭和十七年四月二十二日

夕刊

讀賣新聞

敵機わが猛攻に堪へ兼ね

火を吐き海上に墜落

陸軍部隊戰鬪狀況發表

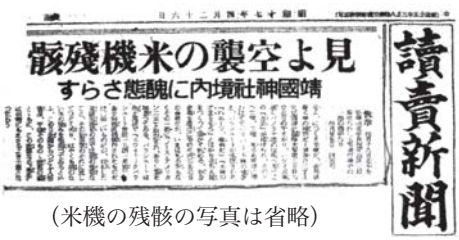
読売　S17. 4. 20（日）２面

敵機來るも體驗ずみ
迅速冷靜 日曜の帝都
銃後の誇り溫い貼紙
買物行列や傍觀嚴禁

読売　S17. 4. 19（日）３面

防空陣試煉 警防團綦組は强し
あッ敵機の胴體に命中彈
逃げ廻る圓に星の米國機
病床蹴って隣家へ
手摑みで燒夷彈捨つ
女一人で消火
學校、病院を盲爆
敵機の非人道ぶり
食糧は安心

読売　S17. 4. 26（日）１面



讀賣新聞
見よ空襲の米機殘骸
すらさ態醜に內境社神國靖

（米機の残骸の写真は省略）

読売　S17. 4. 26（日）４面

女性與風
燒夷彈・叩き消す
S17.4.26

読売　S17. 4. 27（月）２面

遺族に映じた帝都の姿
落ついた市民
空襲下の活動に感動
4.27

表5　米軍による本土初空襲関連の新聞記事（S17・4朝日新聞）

朝日　S17. 4. 19（日）1面

我が猛撃に敵機逃亡
軍防空部隊の士氣旺盛
各地區の警報を解除
名古屋、神戸の被害も輕微
沈着冷靜機敏な處理
誓つて尊き國土を護れ
備へあれば恐るゝに足らず
防空必勝の信念
スマトラ諸島

朝日夕刊　S17. 4. 19（日）

けふ帝都に敵機來襲
九機を撃墜、わが損害輕微
沈着な隣組の大活躍

朝日　S17. 4. 19（日）3面

魂闘る沸騰一億の防空
必滅の民防空に凱歌
バケツ火叩きの殊勲
我家まもる女手
街々に健氣な隣組群

朝日　S17. 4. 21（火）1面

敵機四三隻空しく退却
僅かに約十機分散飛來
殘存機支那大陸へ遁走

朝日　S17. 4. 20（月）3面

來い敵機自信の布陣
燃え盛る燒夷彈も
十秒で揉み消す
日頃の協力こそ第一
家をあけるな

朝日夕刊　S17. 4. 22（水）1面

かくて敵機を撃墜せり
報告
千葉、大島沖で猛追撃
遂に命中彈、黒煙を吐く
米、報復を恐怖

朝日3面　S17. 4. 26（日）
靖国神社に公開された東京初空襲の米機残骸。
左上はパラシュート。

家から見ていた風景である。戦艦榛名、伊勢、日向、長門、大和、その他の多くの軍艦はまだ健在だった。（中略）日本の勝利を信じていたのと、大本営の発表しか情報がなかったために、軍人から流れる噂話でかなりの損害があることは知っていたが、連合艦隊が殆ど無くなっていることなどは知らなかった。

遠藤氏の右の指摘はその通り正しいものと思う。当時は情報としては大本営の発表だけしかないわけであるから、「市民はみな知ってゐた」筈はないからである。特に戦前の横須賀ではカメラも携帯はきびしく詮議され、スケッチも同様であり、絵葉書の類の発行も検閲を受け、一寸小高い丘や山に登ると一一詮議され、追い返されるという具合に監視の目がきびしかったことからすれば解しかねる一行であろう。

F189頁上段15行経った……立った

これは氏の指摘される通り、誤植であり、不注意をおわびする。

他に「雑踏」など全部で20項目を超える指摘を遠藤氏から寄せられたのであるが、問題の普遍性、一般性から考えて、それと紙数の制約から割愛せざるをえなかったことをおことわりしておきたい。

何よりも遠藤氏の鋭い指摘を得て、作品の読みが多角的になり、深められる結果になったことに厚く御礼を申し上げておきたい。

七、終りに

最後に、逸見小学校が海軍に接収された前後の史実について調べ[6]

たところを簡潔に記しておきたい。

明治政府による明治5（一八七二）年8月3日の「学制」制定に対していち早く反応して、相模国三浦郡逸見村は同村582番地、浄土寺本堂を校舎に借用して明治6年5月9日逸見学舎を創立、これが逸見小学校のはじまりであり、横須賀では三番目に古い学校である。その後何度か移転した後、明治34（一九〇一）年3月24日に現在の場所、逸見村590番地（現在の表示：〒238-0046　神奈川県横須賀市西逸見町1―14　電話046（822）0201）の現校地に移った。主因は児童数の増加である。

逸見村は既に明治22（一八八九）年に横須賀町に合併され、同40年には横須賀市として急速な発展を遂げる軍港都市の一部であり、人口の増加と児童数の増加は飛躍的で、明治33年に6学級335名が、5年後の38年には10学級581名と約二倍になり、10年後の43年には16学級910名にふくれあがっている。そのため逸見小学校は明治44年11月1日には児童の一部を分離して尋常沢山小学校が開校された。155頁下段8行で千野の言う「サワ山国民学校」がこれをさすと思われる。

ところで最終的に逸見小学校の校地となった場所については一言ふれないわけにはゆかない。というのは初めてそこを目にした人は恐らく思わずあっと声を発せずにはいられないからである。庄野氏は156～157頁でこう書く。

千野は衛兵の前を過ぎて、校庭へ入つて行つた。運動場を二つの辺を挟んで二階建の明るい色をした木造建築の校舎が立つてゐた。そして運動場の向ふ側はそのまま灌木の多い丘陵となつて聳えてゐた。つまり市内を見下す小高い丘陵のふもとにこの校舎は立つてゐた。

運動場では二十人ばかりの兵隊と一人の隊長が一緒になつて、ドッジボールをやつてゐた。夕食を終わつたあとらしく、校舎の塀のあたりの煙草盆では、このゲームを見ながら休んでゐる兵隊の姿が見られた。

校舎の一番外れにトタンを屋根にした急造の烹炊所が立てられてあつて、ゴムの前掛をした炊事の兵隊が三四人、ドッジボールを眺めてゐた。

最初に千野の眼に映つた夕方のこの光景は、今まで館山やその他の場所で見たものと必ずしも異なるものではないけれども、それにも拘はらずこの校舎の引きこもつた、こじんまりとした環境と、始めて海兵団或は学校を離れて独立した小部隊の寄合世帯から生れ出る自然にくつろいだ感じが、はつきりとそこに感じられたのであつた。

学校は灌木の多い丘陵のふもとに、運動場を前にして立っていたと記すのであるが、実際の逸見小学校の前に聳え立っていたのは、整然と立ち並んだおびただしい数の墓石であり、それはあたかも高さ百以、長さはそれを優に超える七、八階建のマンションが40度前後の急峻な角度で聳えている感があり、そこには一種独特の雰囲気が―それはあるいはそこが代々にわたる無数の死者たちの安息の場であり、鎮魂めの場であったためかもしれない―漂っていた。

なにはさておき作品はそこで生のさなかにある若者たちを見事によみがえらせ、力強く旅立たせて行ったことは確かである。

大正12年9月1日の関東大震災では教員1名が死亡、校舎は大破となるも、大正14年12月26日七万三千円の予算でモダンな新校舎と増改築工事が竣工した。

昭和16年4月1日、横須賀市立国民学校となる（生徒数は１３１９名。高等科142名は除く）。

昭和19年8月31日、学童集団疎開実施に際し220名（三年～六年）が、教員12名付添のもとに、愛甲郡煤ケ谷村、及び宮ケ瀬村に疎開した。宿舎は国民学校の裁縫室・寺・落合青年倶楽部・個人の家などであった。

この疎開によって児童数が激減し、在籍数が500人となった逸見国民学校は残留児童の決戦体制整備にともなって戦時学校統合令が施行され、沢山国民学校に統合[7]、残留児童は沢山校に通学した。

児童のいなくなった逸見小校舎は、海軍の宿舎や海軍動員の整備場の施設に転用[8]された。

小説「逸見小学校」のあつかうのはこの時期にあたる。

その後、昭和20年8月15日敗戦、10月13日疎開地より児童が学校に戻ったが、戦災を受けなかった校舎や運動場をもとの姿にかえすことは容易ではなく、例えば講堂は海軍薬品の倉庫として使われていて、学校で使うことはできなかった。（完）

表６　逸見小学校の教室から校庭を隔てておびただしい数の墓石が小山のように聳えているのが見える。

付　記

本稿を終わるにあたってお世話になった方々に一言お名前を記してお礼を申上げておきたい。逸見の名をはじめて知ったのは旧友池田滋氏の出身地故である。今度の横須賀調査に際しては早速氏と連絡をとって始めたのであるが、あいにく氏の体調不良で対面のかなわなかったのは残念であった。しかし代りに、教え子にあたるいずれも元校長をされた岩沢啓子・今井由美子・渡辺武の三先生を紹介され、この御三方が文献収集と実地踏査の両面からバックアップして下さった事に対して厚く御礼を申上げたい。

又、逸見小学校長の秋吉玲子先生にも長時間にわたっての取材に御礼を申上げる。横須賀市自然・人文博物館学芸員の安池尋幸氏にも資料面で懇切な御教示をたまわった事に御礼申上げる。最後になったが逸見行に一日同行してアドバイスを寄せて下さった新潮社の鈴木力・松村正樹氏にも感謝申上げる。

本稿の素材と横須賀の地勢等については俄か勉強なので思わぬ失考があるかもしれない。大方のご批正をいただければ幸いである。

注

1　『占領下の横須賀―連合国軍の上陸とその時代』05・3・31　横須賀市刊

2　半島史研究会編『新稿三浦半島通史』05・12・15　文芸社

3　キャロル・V・グラインズ　足達左京訳『東京初空襲―アメリカ特攻作戦の記録』（1982・12・10　彩流社　なお原著は1964年刊）

4　『新稿三浦半島通史』前出。石井昭『ふるさと横須賀―幕末から戦後まで―』（下）　昭62・6・15　神奈川新聞社

5　『新稿三浦半島通史』前出。

6　依拠した文献としては主として次のものに拠った。横須賀市立逸見小学校創立百周年記念事業委員会編『逸見百年―逸見と学校のあゆみ―』（昭和48・4・30）。横須賀市教育研究所編『横須賀市教育史通史編』（平成5・12・25）、同上編『横須賀市教育史年表編』（平成5・12・25）。

7　『逸見百年』（前出）は「昭和19年9月」とするが、『横須賀市教育史年表編』（前出）は「昭和19年10月」とする。

8　注7に同じ。